

氷の階段

秋元松代

氷の階段

秋元松代

朝日新聞社

氷の階段

定価 一四〇〇円

昭和五十四年一月三十日第一刷発行

著者 秋元松代

発行者 藤田雄三

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社
東京・大阪
名古屋・北九州

氷の階段 目次

I

朝の一時間 5

親子ごっこ 7

くるま 11

ボールペン 15

路上 18

陽だまり 21

築地にいた頃 29

帰省バス 35

見物人 40

孤児の笑い 45

言葉 50

紙一重 59

病気見舞 63

キャッチボール 69

Ⅱ

アディオス号の歌 75

伝説と創作 88

さまざまな出会い 93

Ⅲ

半日の出歩き 115

ちりめん取材記 119

氷の階段 126

岩木山 133

ななかまど 138

田沢湖・角館 144

菅江真澄 149

昌益の墓 157

民謡と風土 162

Ⅳ

万年橋 175

花田清輝さんのこと 179

ゆかしき苦手 184

坂東玉三郎 188

金井三笑への手紙 192

わたしの一葉 197

一点の喜び 200

Ⅴ

岨夷忌 207

満員バスの隅 213

終焉前後 217

氷の階段

装幀 池田憲二

I

朝の一時間

まだ眠っている家の多い朝の町を歩くことから私の一日が始まるようになった。雨の日でない限りつづいている。冬のあいだは午前六時はまだ暗いので、街路がほの白くなる頃合いをみて出て行く。三月になると日ごとに夜が短くなって五時はもう明るい。往き返りで一時間以内の道を、気の向く方向に歩いている。人に話すと、健康的だとほめてくれるけれど、とくに心がけがいいからではない。夜は原則的に仕事をしないので、朝は夜明けになれば寝飽きてしまふから起きるほかはない。外を歩くようになったのは、ふとしたことから、自分の住んでいる町の地理を知らなすぎるのに気がついてからである。

びっしりと住宅や商店のたてこんだ町の中に住んでいるので、移ってきて十年あまりになるのに、用事のため以外には歩いたことがなかった。しかし、身近かなことはなるべく丁寧に知

っておく方がいい、と思うようになったのは、私の年齢などのためかも知れない。

まだ眠っている家というものは、柔かく暖く息づいているように感じられる。そういう家がひっそりと寄り添っている裏通りを、私はなるべく速い速度で通り抜けていく。ぶらぶら歩きは、人の安らかな眠りを邪魔するような気がする。

私の頭もまだ目をさまし切っていないので、甘く幼い感情に傾いて、今日こそはまじめに勉強しようとか、元気を出そうとか、何かいいことがあるかも知れないとか、自分にとって都合のいい暢気な予想を明滅させている。やや広い通りへ出ると、トレーニングウェアで走っている人に何度か出会う。その中に一人か二人は、すれちがいながらか追越しながらか、お早うございます、と私に声をかけてくれる人がある。誰かたがいに知らないが、朝ごとに優しさの接待をうける思いがある。

一日の終りは、さまざまである。いいことはすくなく、不本意なことは多い。だから始まりはやはり大切にしなければと思う。

親子ごっこ

新聞を読んだあと朝食をしながら、いま読んだ記事が頭のどこかでゆらゆらしているせいで、ふと思い出したことがあった。

その子は前から顔見知りの女子中学生で、私に相談したいことがあるとって訪ねてきたのだ。高校へ進学したいので、夜の時間だけ私の日常家事の手伝いをするから、学費の一部を補助してほしいという。そうしないと中学だけで終りになるらしい。私は話をききながら、その子の家庭や、その子自身について、また私の収入状態などを考えていた。卒業までの三年間、私に約束を実行するだけの心得が持てるかどうか――。少し不安なところもあったが私は承諾した。

高校生になったF子は、日曜日以外は毎日夕方にはきて雑用を手伝ってくれた。私のような

独り住いでは、家事といっても一時間以上はかからない。F子は弟妹の多い家庭の長女だったから、家事には馴れていた。私もなるべく早く帰らせるようにした。

はじめ私が不安に感じたものは、うまく通り抜けて行けそうだった。F子は平凡な目立たない性質の子だったが、父母の苦勞を通じて、おとなの生活には立ち入らないという智恵があった。私はそういうF子を気に入った。もう一つの不安は、私が不親切でなく、親切すぎない限度を守って行くということだった。これは感情的に動揺しやすい私には自制心のいることだったが、どうやらそれも通り抜けて行けそうだった。

何ヶ月かたったころ、F子のお母さんがお礼がてら訪ねてきた。善良なお母さんだった。そして私にいうには、あの子の母親になったつもりで今後とも頼む、というのだった。人がよく手輕に使う言葉とは分っていたが、私はどうしても、はい分りました、とは返事ができなかった。せっかくF子と旨くやって行けそうになった時に、なぜこんな話が持ち出されるのだろう。私は腹立たしさを抑えて「私のような人間はどんな親になったか分かりません、世間には娘を芸者屋に売りとばして飲み代にする親だっているでしょう、私だって大した変りはないかも知れませんか」と、意地わるな返事をして、その善良な実母をびっくりさせた。

人間関係を家族関係の、それも純粹理想型のそれにおきかえないと気の済まない人によく出

会う。これは私が女性であることにも原因しているようだ。それに私の年齢が高くなるにつれて、いわば仮性尊属とでもいう者としての「私」であることを予定調和として求められているのに気づくと、当惑する以外にない。人はそういう時、親の子捨て子殺し、子の親捨て親殺しがあるから、歴史的にも始まり、今もあとを絶たないことを忘れているのだろうか。あるいはそうであるから、理想的な仮性尊属を幻想する仮性卑属が絶えないのかも知れない。幻想するのはその人の勝手だとしても、私は私を生んだ父母が、たとえ不出来な親たちだったとしても、その二人以外の人を父母と呼ぶわけにいかないように、私は誰の母にも叔母にも姉にもなぞらえてもらいたくない。もしそんな仮性尊属的な徳目や雰囲気などの要求が生れたりすると、その人との人間関係は早晩終りがくるだけなのだ。

F子に話を戻すと、高校の三年間には、いろいろの経緯はあったが、私は卒業までは協力した。もちろん充分なことではできなかったが、悔いを残さないように心を配った。F子の就職も見通しがついたので、私は別の町へ引越した。三年間の僅かな協力にすぎなかったが、私にはやはり分に過ぎた約束をしたことだったという思いがあった。

いつかF子からの消息も遠くなって、さらに何年か経って、私がある作品で田村俊子賞をもらった時、北鎌倉の東慶寺へF子が訪ねてきてくれた。新聞で見たのだそうで、可愛い赤

ん坊を抱いていた。

はじめ声をかけられたとき、誰なのか私は思い出せなかった。F子はちょっと恨めしそうにしたが、「先生、この次はノーベル賞をとって下さいね」と、無邪気なことを言って私を笑わせた。会いに来てくれただけでも充分なのに、彼女は幸福そうな若い母になっていた。これ以上のことはないのだった。

F子の思い出を誘ったのは、その朝の新聞に、尊属・卑属という区別が法の刑量の上から廃止されたという記事だった。やっとそういうことになったのかと思ひ、また、言葉の廃止などがあったも、ものごとはさらに遅く歩くものだとも思ったりした。

「東京新聞」昭和四十八年五月